

に卒業眞近の女學生の一團に文樂座を公開して、先代萩御殿の一幕を觀聽せしめたならば如何な感激、如何な興奮を覺へしめることであらうか。やがて母性として、荒鷲の尊き母として將來を約束づけらるゝ彼女達が一度胸奥に刻み付けられた眞摯な教訓、偉大なる覺悟は、やがては日本女性の一人として、何等かの形によつて示現せらるる時期が到來することを信ずるものである。何巻の修養書を繙くよりも、遙かに適切なる實際教訓を目のあたり髣髴せしめ心から感奮せしむる方法として、斯うした試演を繰返し社會に實現せむことを望むものである。

正誤表

頁	一二	段	行	觀	正
ク	上	三	五	谷太夫	若太夫
一四	上	九	竹澤、豊澤	竹澤、鶴澤	豊澤
二〇	上	七	中山嵐三郎	中山徳三郎	紅葉狩
二七	下	一一	須が	彼が	遣へて
二九	下	一七	(五十六歳、 初め)	(五十六歳) 勤め	
第四百十八號	上	一〇	作法と 事例もある	作法を 事例のある 粗朴	
五〇	上	一八	「私の足は ……やうに」	(削除)	
五一	上	一一	「そして」	(削除)	
五一	下	一九	藝道行業	藝道修行	
五二	上	七	藝道の區分	藝道の鎮成 區分	
ク	下	一	欠如せる人	不充分なる 人	
ク	下	一三	次で二名…… (削除)		
ク	下	一四	合に於ての…… (削除)		